

## 同人作品

水まくら 秋山義仁

土を食む鹿の家族が八戸線早く退いてよと汽笛がひびく

八戸の合掌土偶にダブル母熱出せば寝ないで水まくら

八月の逃げ道のない青空にもう一段ギア上げ鳴く蝉

畑棲む老いたる猫がねずみ追うすいと逃げられ時去るを知る

円空や太郎や志功に似ている縄紋土偶は人の心だ

生きんとす蟻をとじこめ光る玉お土産の琥珀怖いとふ妻

狭くとも誰かが生きた廃れ家障子の紙垂れ転がる靴

朝市で販ぐ老婆に買う老婆時たまのちらり老爺は一人

草起<sup>タ</sup>てて風走る小泊岬タケさんみたいな婆様が居た  
雪が降る雪にまみれる奥津軽一族係累外に出る里

ホントかどうかなんて 石邊綾子

本当のことを知らずにあの人時計みているスタバの窓辺  
ロボットを抱けばどこか本当の生き物のよう温もり伝う

本当は寂しいんだろう満月が我の孤独に隠された夜

ほっぺたにシミとほくろがせめぎ合い奪い合うかの女の勲章

一にちの心は不思議ロボットに見透かされつつアジサイの花

ロボットの残像そつと吹き消してユーチューバーの犬を見ている

不条理をそれとも知らず浅茅生に巣くう者らに惜別の歌

嘘だって真実だってどうだってレモンサワーのような夜更けに

暮れてゆく影が伸びてゆく先にサクラが黒い鼻をのぞかせ  
ため息につられ吐き出す傍らに空気清浄ひたすらまわる

春から夏へ 井上省吾

暖かくなつて喜ぶ人々に若葉芽をふき目を楽しませ  
朝日浴びうす緑色でゆらゆらと可愛い若葉そよ風をあび  
春になりパット開いたクレマチスここにいろよと大輪の花  
春の陽に花喜んで目をさまし色とりどりの姿表わす  
桜散りツツジの花が咲き始めにぎわいを増す庭の花々  
剪定を終えてすつきりツツジの木来年もまた期待ふくらむ  
ボケの花一本の木に赤と白まわりは緑パット目をひく  
移しかえ根づきが弱く小ぶりだがまっかな色の数りんの花

つるバラを柵にからませときをまつ蕾まだかと毎日ながめ  
首のばし花菖蒲つぎつぎと花を咲かせる五月の初め

かたはらに 加山妙子

夫も子も喪ひしわがかたはらに月星宇宙語る幼な児

雨の中 熊谷恒樹

あれも捨てこれも処分と決めたのに又迷いだす長雨続く  
からっぽの箱を蹴飛ばしその余り抵抗無さに拍子ぬけして  
庭先で雨にしおれて若みどり紅一点のザクロの蕾

なの花 甲村秀雄

なの花の乱れに咲いてをる野べにいつかかならず行かなあの日に

終はる日 甲村雅俊

終はる日は定かならねどガガガと道路工事のような人生  
拾ひ来て数日経てばおのづから割れて現はるどんぐりの実は  
良いことが起こる気がしてしばらくは赤飯をわが朝餉にしたり  
時季外れにハトのひな二羽孵れども秋のある日に骸となれり  
草原をゆつたり歩む牛の眼に景色は美しく映りたるなり  
ひさかたの絵空事でも日の丸を建国記念の日に掲げたり  
大空に虹がかかればあまたなるスマホ写真に込めらるる願ひ  
梅の咲く公園にきて夕影に映ゆる優しき姿を愛づる

ベランダにわが親しみていつも来る尾の白き鳩長生きをせよ  
つかの間の安らぎをわが覚えたり病み臥す猫の顔を舐めれば  
夜桜は美しく咲き死の国へ生きとし生けるものをいざなふ  
動かざる闇となりにし黒猫のむくろにわれの悲しみの手を  
行くぞチョコ、ありがたうとふ声をかけ棺をかかへ野べの送りに  
高温で焼かれてチョコは壺のなか模型のやうなその頭蓋骨  
コロナ禍は百年続く試練なりその二年目で音を上げるものか  
白檀の香り広がり線香の灰のごとくにこころ鎮まる

黒猫讃歌 氷室敬子

ひさかたのひかり差し入るベランダに春を告げいるカタバミの花  
弥生月はる一番の風強くこころのうちを曝してしまふ

家に居ろ外にでるなと云われても空虚の心どこに置かんか

山盛りのタケノコご飯パクパクとわが息子すでに五十代なり

ハナミズキ上を向いて咲いていた五月の風に青葉となれり

丁寧に剪定された中庭の垣根のツツジ春待っている

この道を行けばすぐに見えてくる亡き母の居た段々畑

しっかりと働くのだと左手を励ましいる洗髪の時

セーターは母のかたみの赤い糸みのうち深く安らぎ包む

おおかたの街路樹の葉は枯れていて師走の風に落ち葉となれり

初詣上まで行かずふかぶかと頭を下げて来年を祈る

ため息はひとつでよいと思う故深呼吸に切りかえようか

ぬばたまの黒猫チョコはおしゃれなり首にひとつぶ白い毛を持つ

ああチョコよ応えておくれ黒猫のその気品はどこで得たのか

黒猫のチョコをあずかり十日ほどニャオニャオのこえをなつかしむ  
最後の日さくら色のうるんだ目を見せてくれたチョコだった  
あの日からまもなくして黒猫は死んだという忘れはしない  
チョコよ 君のおもかげ忘れないもどっておいでかい主のもとへ  
裾長くスカートなびかせ行く人は馬込の坂を彩りている  
さらさらと五月の風は吹き抜けて悩みなどはなかったように

ひらひらと 本田洋子

だんご虫うっかり踏みそになりしかど彼も小さな地球の仲間  
枇杷の実やかぐわしき花冬に着け春を越えてぞたわわに稔り  
贈られし歌集一冊窓辺にて手元の明かりは春の残照  
病みてより心の対話できなくてまして歌など詠むことできず



ひらひらと生まれたばかりのモンキチヨウからすのえんどう群れ咲く中へ

愛の多様性 丸山光

耕され春の準備を終えし田につがいのサギが足跡つける

膝かかえ尻突き出して内視鏡へその緒のごとカメラが入る

満載のクルマが何を落としたか曲がるスピード落として左折

ただかじる少し休んでまたかじる最後にじいじのわたしを齧る

特選のわたしの歌を一目見て賞金あるのと妻の一言

キミらより後に逝くことあるかもと脅しておれど笑顔の息子

きみを愛できみを抱いては愛しむ愛しけれども愛は愛しき

なぜだろうだんだん大きくなつたのにみんな忘れて老いのことだけ

お金にはもともとお札はないんだよ硬貨ばかりで買える駄菓子屋

正直な広告なれど売れぬだろう 駅から徒歩で七五分

スタートライン 守乃みさと

赤銅に透ける木の葉を見上げてはぽつりぽつりと祖父母の歩く  
秋晴れのような笑顔の君のため選ぶ香水金木犀

祈ってますよく食べよく寝よく笑い世界を君が咲かせることを

今我は羽ばたきを聞く鳩のごと真実胸に旅立つ君の

この人のこの顔を見るためだけに生まれてきたと思う今夜か

ポケットの中で繋いだ君の手の骨張る温さに月が綺麗で

境内にはらはらと舞う桜花私を許してくださいさってるの

今ここがスタートラインと決めていいこれからだつて自分で決める

鳴らない電話 若杉ゆき

亡き母の三回忌終えひと月後母のもとへと旅立った父

母逝きし一人棲む父毎朝の生きとるばい！のケイタイコール

父いない今でもずっと我のケイタイ父の名前とLINEそのまま

朝起きるといつものように父からの鳴らない電話待つ私がいる

両親も詠みし短歌をこれからはあなたが詠めよと天からの声が

真夜中の高層ビルに蒼い薔薇降り注ぐ街アイランドシティ

三日月が高層ビルにかかる街そこはむらさき蜃気楼の中

夜更けてレモン酎ハイ一人飲む前のタワマン棲む人はいかに